sdmpパッケージによるMapleの高速化-行列式の計算を例に

木村欣司(京都大学大学院情報学研究科)

March 23, 2010

前回の補足(I)

前回の「GotoBALS入門」で紹介した内容を 反映した世界最速の固有多項式計算プログラ ムは、

http://www-is.amp.i.kyoto-u.ac.jp/kkimur/charpoly.html からダウンロードできます

前回の補足(II)

NehalemマイクロアーキテクチャのCPU においてGotoBLASを実行させる場合の注 意

Intelの最新CPUであるNehalemマイクロアーキテクチャのCPUを搭載したマシンで、GotoBLASを動作させる場合には、Hyper-Thread technologyはoffにするべし

Windowsの場合 BIOSで簡単にoffにできる

MacにおけるHyper-Thread technologyをoffにする方法

Mac OSでroot権限を取得し、terminalで、 nvram SMT=0 とすると、OFFにできる

今日のお話

数式処理ソフトMapleは、計算速度が。。。 少なくとも、多変数多項式の4則演算については、sdmpパッケージを用いて高速化できる

http://www.cecm.sfu.ca/~rpearcea/ 多変数多項式の4則演算だけで、なにか面白 いことはできないであろうか?

高速な多変数多項式の4則演算があれば

- (1) 多変数多項式を成分にもつ行列式の計算を高速化できる
- (2)終結式の計算を高速化できる
- (3) Cylindrical Algebraic DecompositionのProjectionを高速化できる
- (4)Dixonの多重多項式終結式の計算を高速化できる
- (5) 多変数多項式を成分にもつ連立一次方程式の計算

を高速化できる

ただし、プログラミングをする元気があれば。。。

Dixonの多重多項式終結式

$$f(x,y) = x^2 + y^2 - 3, g(x,y) = xy - 1$$

交点を求める

$$\frac{\left| f(x,y) \ g(x,y) \right|}{f(\alpha,y) \ g(\alpha,y)}$$

$$= (\alpha 1) \begin{pmatrix} y & -1 \\ -1 & -y^3 + 3y \end{pmatrix} \begin{pmatrix} x \\ 1 \end{pmatrix}$$

$$= 0$$

α に関係なく成立する

$$y = \lambda, v = \begin{pmatrix} x \\ 1 \end{pmatrix}$$

とおけば,

$$\begin{pmatrix} \lambda & -1 \\ -1 & -\lambda^3 + 3\lambda \end{pmatrix} v = 0$$

固有多項式

$$\begin{vmatrix} \lambda & -1 \\ -1 & -\lambda^3 + 3\lambda \end{vmatrix} = 0$$

から、yの値が求まる、この方法は、3変数以上でも適用可能である

有理式を成分にもつ行列式の計算法

(1)有理式のまま計算する

(2)

$$\begin{vmatrix} \frac{1}{(2+3x)(14+15x)} & \frac{4+5x}{(6+7x)(14+15x)} \\ \frac{8}{9+10x} & \frac{11+12x+13x^3}{(2+3x)(16+17x)} \end{vmatrix} \Rightarrow \\ \begin{vmatrix} 6+7x & (2+3x)(4+5x) \\ 8(2+3x)(16+17x) & (9+10x)(11+12x+13x^3) \end{vmatrix}$$

(3)

$$\Rightarrow \begin{vmatrix} a & b(4+5x) \\ 8c & ad(11+12x+13x^3) \end{vmatrix},$$

$$a = \frac{1}{2+3x}, b = \frac{1}{6+7x}, c = \frac{1}{9+10x}, d = \frac{1}{16+17x}$$

多変数多項式を成分にもつ行列式の計算法

- 1. 小行列式展開, $O(2^n)$, 割り算なし
- 2.久留島-ラプラス展開, ???, 割り算なし
- 3.fraction-free Gauss消去法, $O(n^3)$,割り算あり
- 4.木村の補間法, ???, mod 演算あり
- 5. Berkowitzの方法, Fadeevの方法,
- $O(n^4)$,割り算なし
- 単純な多項式の演算の数だけで性能を決めて はならない

fraction-free Gauss消去法

多項式で構成される $n \times n$ の行列Cが与えられたとき、 $\widehat{c}_{0,0}^{(-1)} = 1, \widehat{c}_{i,j}^{(0)} = C_{i,j}$ として、以下の漸化式に従って計算を行う

$$\widehat{c}_{i,j}^{(k)} = (\widehat{c}_{k,k}^{(k-1)} \widehat{c}_{i,j}^{(k-1)} - \widehat{c}_{k,j}^{(k-1)} \widehat{c}_{i,k}^{(k-1)}) / \widehat{c}_{k-1,k-1}^{(k-2)}$$

$$k+1 \le i \le n, k+1 \le j \le n, k=1, \dots, n-1$$

行列式は、 $\widehat{c}_{n,n}^{(n-1)}$ に現れる、0による除算を避けるために、ピボット選択を適宜行ってよい、Jacobiの恒等式が理論の背景、数学的にカッコイイだけ、性能は悪い

fraction-free Gauss消去法

多項式で構成される $n \times n$ の行列Cが与えられたとき、 $\tau_{0,0}^{(-1)} = 1, \tau_{i,j}^{(0)} = C_{i,j}$ として、以下の漸化式に従って計算を行う

$$\tau_{i,j}^{(k)} = (\tau_{k,k}^{(k-1)} \tau_{i,j}^{(k-1)} - \tau_{k,j}^{(k-1)} \tau_{i,k}^{(k-1)}) / \tau_{k-1,k-1}^{(k-2)}$$

$$k+1 \le i \le n, k+1 \le j \le n, k = 1, \dots, n-1$$

行列式は、 $\tau_{n,n}^{(n-1)}$ に現れる、0による除算を避けるために、ピボット選択を適宜行ってよい、Jacobiの恒等式が理論の背景、数学的にカッコイイだけ、性能は悪

Berkowitzの方法(I)

固有多項式の計算法

$$A = \begin{pmatrix} A_r & S \\ R & a_{r+1,r+1} \end{pmatrix}$$

$$T_A = \begin{pmatrix} 1 & 0 & \cdots & 0 \\ -a_{r+1,r+1} & 1 & \cdots & 0 \\ -RS & -a_{r+1,r+1} & \cdots & 0 \\ & & & \ddots & & \\ -RA_r^{r-2}S & -RA_r^{r-3}S & \cdots & 1 \\ -RA_r^{r-1}S & -RA_r^{r-2}S & \cdots & -a_{r+1,r+1} \end{pmatrix}$$

Berkowitzの方法(II)

```
[procedure Berkowitz(A)]
    if dim A=1 then return [1, -A_{1,1}]
   else r \leftarrow (\dim A) - 1
               Decompose A = \begin{pmatrix} A_r & S \\ R & a_{r+1,r+1} \end{pmatrix}
                Compute T_A
                \begin{bmatrix} X_{r+1}, \cdots, X_1 \end{bmatrix}^{\top} \leftarrow \mathsf{Berkowitz}(A_r) \\ \begin{bmatrix} X_{r+2}, \cdots, X_1 \end{bmatrix}^{\top} \leftarrow T_A[X_{r+1}, \cdots, X_1]^{\top} \end{bmatrix}
                return [X_{r+2}, \cdots, X_1]^{\top}
```

何を使えばよい?

小次元 ⇒ 1.小行列式展開, 2.久留島-ラプラス展開

多項式の変数の種類が少ない ⇒ 4.木村の補間法

大次元、多項式の変数の種類が多い ⇒ そんなものは、計算できるわけがない

Resultant(終結式)の計算法

- 1. Collinsのsubresultantによる計算法
- 2. 行列式を経由した計算法
- 3.木村の補間法

行列式を経由した終結式の計算法

$$f = a_2x^2 + a_1x + a_0, g = b_1x + b_0$$

Sylvesterの表現法

$$\operatorname{res}_{x}(f,g) = \begin{vmatrix} a_{2} & a_{1} & a_{0} \\ b_{1} & b_{0} & 0 \\ 0 & b_{1} & b_{0} \end{vmatrix}$$

m次とn次の多項式の終結式の $(m+n)\times(m+n)$ 行列式による表現

$$f = a_2x^2 + a_1x + a_0, g = b_1x + b_0$$

Bezoutの表現法

$$\operatorname{res}_{x}(f,g) = \begin{vmatrix} b_{0} & b_{1} \\ -b_{1}a_{0} & b_{0}a_{2} - b_{1}a_{1} \end{vmatrix}$$

m次とn次(m > n)の多項式の終結式の $m \times m$ 行列式による表現

1.小行列式展開, 2.久留島-ラプラス展開の 重要な応用

- 非凸の多項式型の最適化問題 C Quantifier Elimination
- Q.E.は, Cylindrical Algebraic Decompositionで解ける
- C.A.D.は、Resultant(終結式)を必要とする

小行列式展開法

$$\begin{vmatrix} a_1 & a_2 & a_3 & a_4 \\ b_1 & b_2 & b_3 & b_4 \\ c_1 & c_2 & c_3 & c_4 \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} +a_1(b_2(\underline{c_3d_4} - d_3c_4) - c_2(\underline{b_3d_4} - d_3b_4) \\ +c_1(\underline{a_2(b_3d_4 - d_3a_4)}) - b_1(\underline{a_2(c_3d_4 - d_3c_4)}) \\ +c_1(\underline{a_2(b_3d_4 - d_3b_4)}) - b_2(\underline{a_3d_4} - d_3a_4) \\ +d_2(\underline{a_3b_4} - b_3a_4)) - d_1(\underline{a_2(b_3c_4 - c_3b_4)}) \\ -b_2(\underline{a_3c_4} - c_3a_4) + c_2(\underline{a_3b_4} - b_3a_4)) \end{vmatrix}$$

計算結果の使いまわし(bottom up)をする とスピードはあがる,メモリは溢れる!

久留島-ラプラス展開

```
L_1 = a_{4,4}a_{5,5} - a_{4,5}a_{5,4}, L_2 = a_{4,3}a_{5,5} - a_{4,5}a_{5,3}, L_3 = a_{4,3}a_{5,4} - a_{4,4}a_{5,3},
L_4 = a_{4,2}a_{5,5} - a_{4,5}a_{5,2}, L_5 = a_{4,2}a_{5,4} - a_{4,4}a_{5,2}, L_6 = a_{4,2}a_{5,3} - a_{4,3}a_{5,2},
L_7 = a_{4,1}a_{5,2} - a_{4,2}a_{5,1}, L_8 = a_{4,1}a_{5,5} - a_{4,5}a_{5,1}, L_9 = a_{4,1}a_{5,4} - a_{4,4}a_{5,1},
L_{10} = a_{4,1}a_{5,3} - a_{4,3}a_{5,1}
\det(A) = +(a_{1,1}a_{2,2} - a_{1,2}a_{2,1})(a_{3,3}L_1 - a_{3,4}L_2 + a_{3,5}L_3)
              -(a_{1,1}a_{2,3}-a_{1,3}a_{2,1})(a_{3,2}L_1-a_{3,4}L_4+a_{3,5}L_5)
              +(a_{1,1}a_{2,4}-a_{1,4}a_{2,1})(a_{3,2}L_2-a_{3,3}L_4+a_{3,5}L_6)
              -(a_{1,1}a_{2,5} - a_{1,5}a_{2,1})(a_{3,2}L_3 - a_{3,3}L_5 + a_{3,4}L_6)
              +(a_{1,2}a_{2,3}-a_{1,3}a_{2,2})(a_{3,1}L_1-a_{3,4}L_8+a_{3,5}L_9)
              -(a_{1,2}a_{2,4} - a_{1,4}a_{2,2})(a_{3,1}L_2 - a_{3,3}L_8 + a_{3,5}L_{10})
              +(a_{1,2}a_{2,5}-a_{1,5}a_{2,2})(a_{3,1}L_3-a_{3,3}L_9+a_{3,4}L_{10})
              +(a_{1,3}a_{2,4}-a_{1,4}a_{2,3})(a_{3,1}L_4-a_{3,2}L_8+a_{3,5}L_7)
              -(a_{1,3}a_{2,5} - a_{1,5}a_{2,3})(a_{3,1}L_5 - a_{3,2}L_9 + a_{3,4}L_7)
               +(a_{1,4}a_{2,5}-a_{1,5}a_{2,4})(a_{3,1}L_6-a_{3,2}L_{10}+a_{3,3}L_7)
```

計算結果の使いまわしができる

計算結果の使いまわし=テーブル参照

一度計算した結果を、使いまわす伝統的な方法

Lisp言語による数式処理の実装 Lisp言語のHash関数によるテーブル参照

Hash関数を使って、小行列式展開を実装する必要が本当にあるのか?

5 × 5から3 × 3の小行列式を抜き出す

左のindexから、右の"データ位置"を出す

```
3 4 5 1
2 4 5 21 4 5 3
2 3 5 4
1 3 5 5
1 2 5 6
2 3 4
1 3 4
1 2 4
1 2 3
```

計算によるデータ位置への到達

```
w[k]は、index、例(234)、c[i][j] = \begin{pmatrix} i \\ j-1 \end{pmatrix}
```

```
n=5; i=3; u=1; b1=n-1;
for(k=i;k>0;k--){
  for (b2=b1;b2>=w[k];b2--)
    u=u+c[b2][k];
  b1=b2-1;
```

多変数多項式のメモリにおける表現方法

再帰表現 ⇒ 因数分解で効率的 分散表現 ⇒ 多項式の積で効率的 geobucket表現⇒ グレブナ基底の計算で効 率的

因数分解においては,再帰表現が絶対的に効率的,分散表現から再帰表現への変換が必要

行列式の展開による計算では、"多変数多項式の積"の計算が必要

再帰表現 ⇒ 1変数多項式の場合の筆算方式 の再帰的実行

分散表現 ⇒ heapの利用(sdmpの方法)

分散表現 ⇒ 分割統治法(Singularの方法)

$$(f_1 + f_2) \times (g_1 + g_2) =$$

 $f_1g_1 + f_1g_2 + f_2g_1 + f_2g_2$

再帰的に実行

分散表現とは?

多変数多項式を、係数と指数の組の結合され たリストで持つ

$$f = 5x^2y + 6x + 7y + 8$$

(5, [2, 1]) \rightarrow (6, [1, 0]) \rightarrow (7, [0, 1])
 \rightarrow (8, [0, 0])

分散表現における多変数多項式の積(heapの利用)

 X_j, Y_j は、ある順序でそれぞれすでにソートされている、 $m \leq n$ のとき

$$(X_1 + X_2 + \dots + X_m)(Y_1 + Y_2 + \dots + Y_n)$$

$$= X_1(Y_1 + Y_2 + \dots + Y_n) + X_2(Y_1 + Y_2 + \dots + Y_n) + \dots$$

$$\dots$$

$$X_m(Y_1 + Y_2 + \dots + Y_n)$$

待ち行列理論

$$(X_1Y_1 + X_1Y_2 + \cdots + X_1Y_n) +$$

 $(X_2Y_1 + X_2Y_2 + \cdots + X_2Y_n) +$
 \cdots
 $(X_mY_1 + X_mY_2 + \cdots + X_mY_n)$

 Y_1, Y_2, \dots, Y_n は、すでにソートされているために、 X_j の作用によっても、その順序は不変、m本の待ち行列ができていると思える

- 積の結果も、元の順序でソートする =m本の待ち行列に対して、1個のサーバーを置き、待ち行列の先頭の位置の人の中で、順序が一番大きな人を探す
- -1個のサーバーの前に、中間的な2分木を用 意する、2分木のrootの人はぬける、ぬけた ことにより、2分木の作り直す、rootの位置 の人が属する待ち行列の2番目の人は、中間 的な2分木の中に入る、入ったことにより、2 分木の作り直す,それを繰り返す

多変数多項式の積における再帰表現と分散表 現の比較

sdmpの論文の結果参照

多変数多項式の積では、分散表現のほうが再 帰表現よりも優れている

heapの究極の利用

$$u = (a_1 - b_1 c_1)$$

$$v = \begin{pmatrix} b_2 & b_3 & a_2 & a_3 & a_2 & a_3 \\ c_2 & c_3 & c_2 & c_3 & b_2 & b_3 \end{pmatrix}$$

とすると

$$\begin{vmatrix} a_1 & a_2 & a_3 \\ b_1 & b_2 & b_3 \\ c_1 & c_2 & c_3 \end{vmatrix}$$

$$= a_1 \begin{vmatrix} b_2 & b_3 \\ c_2 & c_3 \end{vmatrix} - b_1 \begin{vmatrix} a_2 & a_3 \\ c_2 & c_3 \end{vmatrix} + c_1 \begin{vmatrix} a_2 & a_3 \\ b_2 & b_3 \end{vmatrix}$$

$$= u \cdot v$$

成分同士の掛け算u[1]とv[1], u[2]とv[2], u[3]とv[3]において、個別に待ち行列を生成するのではなく

内積を一つの演算と思い

u[1]とv[1], u[2]とv[2], u[3]とv[3]の積に おける待ち行列を始めに一気に生成し、内積 全体で、1つのサーバーを用意すればよい

当面は

sdmpパッケージによるMaple上での多変数多項式を 成分にもつ行列式の計算の実装を、お使いください

http://www-is.amp.i.kyoto-u.ac.jp/

kkimur/susemi_etc.html

将来は

- 1.sdmpよりも高速な多変数多項式の積の実装
- 2.内積を1つの演算とした場合の多変数多項式を成分
- にもつ行列式の計算の実装
- を, 私が作りますので, ご期待ください

sdmpパッケージを利用するための最重要事 項

sdmpの高速性のキモは, 多変数多項式のexponent vectorのいくつかの成分を1 word に詰め込むこと(packオプションをつかう)

$$f = 5x^2y + 6x + 7y + 8$$

(5, [2, 1]) \rightarrow (6, [1, 0]) \rightarrow (7, [0, 1])
 \rightarrow (8, [0, 0])

32bitのマシン, pack=2

上位16bit	下位16bit
2	1

しかし,動的に, exponent vectorを延ばす機能は持っていない

⇒ 行列式の計算結果の次数に対する上界計算アルゴリズムが必要

sdmpパッケージを利用するための数学の問 題

$$\begin{vmatrix} 1+x & 2+2x \\ 2+2x & 4+4x \end{vmatrix} = 0$$

小行列式の次数が全体の次数よりも大きい場合があるので、"行列式の計算結果の次数に対する上界"というよりも、

$$\begin{vmatrix} a_1 + a_2x & a_3 + a_4x \\ a_5 + a_6x & a_7 + a_8x \end{vmatrix}$$

与えられた多項式に対するgeneric position の多項式の "行列式の計算結果の次数に対する上界" を考えることにする(すべての小行列式の次数の上界の最大値を計算できれば。。。)

だれでも思いつく行列式の計算結果の次数に 対する上界計算アルゴリズム

各行の最大次数の総和と各列の最大次数の総和の小さいほう

計算量のオーダーは、 $O(n^2)$

多項式を成分にもつ行列式の計算法の復習

- 1.余因子展開, $O(2^n)$,割り算なし
- 2. 久留島-ラプラス展開, ???, 割り算なし
- 3.fraction-free Gauss消去法, $O(n^3)$, 割
- り算あり
- 4.木村の補間法, ???, mod 演算あり
- 5. Berkowitzの方法, Fadeevの方法,
- $O(n^4)$,割り算なし

定理

割り算を含まないアルゴリズムならば,

$$+,-\Rightarrow \max, \quad \times \Rightarrow +$$

とすることで、与えられた多項式に対する generic positionの多項式の行列式の計算結 果の次数に対する上界計算アルゴリズムが得 られる

fraction-free Gauss消去法から上界計算アルゴリズムが得られない???

 $O(n^2), O(n^4), O(2^n)$ のアルゴリズムが存在するにも関わらず、

 $O(n^3)$ のアルゴリズムがないのは、気持ちが悪い

fraction-free Gauss消去法から行列式の計算結果の次数の上界公式の導出

$$\tau_{i,j}^{(k)} = (\tau_{k,k}^{(k-1)} \tau_{i,j}^{(k-1)} - \tau_{k,j}^{(k-1)} \tau_{i,k}^{(k-1)}) / \tau_{k-1,k-1}^{(k-2)}$$

$$k+1 \le i \le n, k+1 \le j \le n, k = 1, \dots, n-1$$

に対して,次の漸化式を考える

$$d_{0,0}^{(-1)} = 0, d_{i,j}^{(0)} = \deg_x(C_{i,j}) \ge \bigcup \mathcal{T},$$

$$d_{i,j}^{(k)} = \max(d_{k,k}^{(k-1)} + d_{i,j}^{(k-1)}, d_{k,j}^{(k-1)} + d_{i,k}^{(k-1)})$$
$$-d_{k-1,k-1}^{(k-2)}$$

$$k+1 \le i \le n, k+1 \le j \le n, k = 1, \dots, n-1$$

行列式の計算結果の次数の上界は, $d_{n,n}^{(n-1)}$ に現れる

どうしてか?

宿題

答えを知りたい人は,

http://www-is.amp.i.kyoto-u.ac.jp/

kkimur/susemi.html

"ガウスの消去法ベースの $O(N^3)$ の行列式の計算結果に対する次数の上界計算アルゴリズム"を見て下さい

最後に

小次元 ⇒ 1.小行列式展開, 2.久留島-ラプラス展開

http://www-is.amp.i.kyoto-u.ac.jp/

kkimur/susemi_etc.html

多項式の変数の種類が少ない ⇒ 4.木村の補間法

http://www-is.amp.i.kyoto-u.ac.jp/

kkimur/susemi_interpolation.html

別の機会に、「木村の補間法入門」という話題で、お

話することを約束します